

母親になった金子みすゞ

木 原 豊 美

はじめに

金子みすゞの詩は九十余年前に、平易な口語体の「ことば」から構成された。そのことが現在も老若男女に支持されているゆえんかもしれない。またみすゞは詩人ではなく、必ず童謡という常套語が付いた「童謡詩人」として称される。にも拘らず『金子みすゞ全集』により五〇〇余篇の作品が発行されるまで、みすゞの生存中よりも、童謡として作曲され歌われることはなかった。しかも作品には、人生の悲哀や深みがないとの論評さえあった。しかし、「ことば」と「ことば」が紡ぐわずかな行間には、人生の喜怒哀楽を子供の言葉にすり替えた、実に重みのある深い思いが畳み込まれている。

大正十二(一九二三)年雑誌『童話』九月号に、作品へお魚〈打出の小槌〉が掲載された。選者の西條八十は、初投稿の金子みすゞに「閨秀の童謡詩人が皆無の今日、この調子で努力して頂

きたい」と、最高の賛辞を贈った。この選評に依ってその後、独りで精進したみすゞであった。しかし同時期に八十からは抒情詩も認められ、大正十二年『婦人画報』九月号の〈おとむらひ〉は、翌年『現代抒情小曲選集』(西條八十編)におさめられた。

あくまで子供が口ずさみ、子供のための表現者であったはずのみすゞである。が、どんなに隠しても母親になってからの作品に、母親としての心が、ひょいと顔を出している事に筆者は気付いて久しい。しかし、発表した書籍『金子みすゞ心の風景』・『金子みすゞ再発見』の拙稿においても童謡詩人としてのみすゞ像を強調するあまり、母親としてのみすゞに触れることを避けた。しかしいくら待っても、母親としてのみすゞ像を誰も語らない。そこで「母親であるみすゞ」を感じて欲しいと始めた動機から、詩作順に五作品を紹介して母親になった金子みすゞ像を作品に即して紐解いてみたい。なお文中() 付きカタカナ、() 付き注は末尾の参考文献一覧に照応する。

母親になった金子みすゞ

一 母親の心がこぼれていた 〈赤い靴〉

二〇二二年十一月十日梅光学院大学キャンパスで、アルス梅光公開セミナー（梅光学院生涯学習センター）の文化祭が実施された。平成十五（二〇〇三）年より始まった「みすゞの世界を散歩する」の受講生は、例年通り「みすゞの世界に遊ぶ」と題したオマージュ制作発表会に参加した。全員で挑戦するテーマに、母親の心根が溢れている〈赤い靴〉を選んだ。歩き始めに幼子が履く小さな靴用の型紙と試作品を、不器用ながら用意して授業に取り組んだ。この作品を選んだ第一の要因は、長年感じてきたみすゞの「母心」を共に感じてもらいたいからであった。

赤い靴

空はきのふもけふも青い、
路はきのふもけふも白い。

溝をのふちにも花が咲いた、
小ちさいはこべの花が咲いた。

坊やもべべがかるくなつて、
一足、二足、あるき出した。

一足踏んでは得意とくいさうに、
笑ふ、笑ふ、聲をたてて。

買ったばかりの赤い靴で、
坊や、あんよ、春が来たよ。

『金子みすゞ全集』について『童謡詩人・金子みすゞの生涯』
から、引用する。

雅輔（筆者注…実弟・正祐のペンネーム）が持っていた三冊の遺稿集（筆者注…昭和四年に清書されたもの）は小型手帳（筆者注…博文館のポケット日記）の紙質見本に書かれたもので、それぞれ扉に「美しい町」「空のかあさま」「さみしい王女」と題が書かれてあった。

第一童謡集『美しい町』—大正十二年から大正十三年（一九二三）
—一九二四）までの一七二篇、

第二童謡集『空のかあさま』—大正十三年から大正十四年
（一九二四—一九二五）までの一七八篇、

第三童謡集『さみしい王女』—大正十五年から昭和三年
（一九二六—一九二八）頃までの一六二篇。

上記から『金子みすゞ全集』には、総計五二一篇が納められており、独身時代は第一巻・第二巻、結婚後は第三巻であることが分かるが、『童謡詩人・金子みすゞの生涯』から①年譜を②美弟・上山正祐(庄三)の書簡も取り上げてみる。

① 金子みすゞ年譜

大正十五年(一九二六)

一月六日、正祐、テル(みすゞ)と宮本啓喜との結婚の話を聞く。正祐建白書を出す。

二月一日、正祐訪仙。翌二日、三上山の麓で正祐涙の談判。この頃すでに第一童謡集『美しい町』、第二童謡集『空のかあさま』完成。(筆者注：初期形)

二月十七日、宮本啓喜と結婚。

十一月十四日、ふさえ誕生。

② <正祐書簡・大正十五年二月十四日付・発信地 山口県山口市>

山口へ来ています。ヒッソリしていて気持ちのいゝ晩です。あなたの選集とおぼしき二冊を、汽車中と宿で読んで、それから作曲用のものを抜いて見ました(筆者注：二冊は初期形の『美しい町』・『空のかあさま』を指し、同日みすゞから正祐が預かったことが『童謡詩人・金子みすゞの生涯』にある)。

母親になった金子みすゞ

よって第三巻一四九番(全集収載詩の四九九番目)に収まる〈赤い靴〉は、結婚後に当たる。みすゞの〈赤い靴〉は、天下の詩人・野口雨情の〈赤い靴〉を意識して生まれたものではない。雨情の赤い靴を履いていたのは、異人さんに連れられて日本を去った悲しい女の子である。対してみすゞの赤い靴からは、早春の陽射しの中で、赤い靴の坊やの得意げな笑い声が絶え間なく聞こえ、なんとも幸せな思いに包まれてしまう。坊やの無意識な仕草は、愛されている幼子に与えられる特権なのだろう。

幼子の一挙手一投足を息をのんで見守るテルと、隠しきれないみすゞの母親としての眼差しがない交ぜになってこぼれている。実際に母親のテルがふさえさんのために、靴を買い揃えたのかは定かではない。今でこそ男女共に個性あるファッションは常識であるが、九十余年前、ふさえさんのために母親テルが選んだとしたら、靴の色は「赤」にまちがいない。しかし、みすゞは敢えて主人公に「坊や」と呼びかけながら母親の心情が、「買ったばかりの赤い靴で」と思わず娘の「ふさえさん」を重ねてしまった。ちなみに小さい女の子を「嬢ちゃん」と表現している三作品があるので、簡単に提示してみる。

①第一巻三十一番〈麥藁編む子の唄〉

くやがてかわいいおかつばの、／嬢ちゃんのおつむにかぶられる……。

②第一卷三十八番〈なまけ時計〉

「旦那さんの役所もやすみなら、坊ちゃん、嬢ちゃん、みんな休み。」

③第二卷十五番（収載詩の一八七番）〈お使ひ〉

「よその嬢ちゃんのおべべ、しつかり胸に抱きしめて。」

みすゞは私的な出来事を筆の力で「嬢ちゃん」ではなく、「坊や」と表現した。しかしみすゞが「その坊や」に用意したのは、「赤い靴」であった。赤い靴こそ生命力に満ち溢れ、はじめて第一歩を踏み出す幼子を祝福するのに、最も相応しいものだといえる。さらに幼子が歩む先には、青い空とまだ汚れていないどこまでも広がる、白い大きな路を紡いだ。

次に、幼子が歩き始める時期を参考までに提示してみる。いずれも「歩けるようになるのには、早い人は早く個人差はつきものです」と断った上で、おおよそ

①誕生日を過ぎて二、三週間〜一年四ヶ月

②一才〜一才三ヶ月……と、ある。この二説を踏まえると、ふさえさんの一歳三、四ヶ月は、昭和三（一九二八）年の立春から、

ハコベが盛りの三月の中頃に当たる。〈赤い靴〉には、母親の心がこぼれていた。ふさえさんの人生の第一歩に、みすゞは間違いなく、母親としての精一杯のエールを贈っていた。なお、手作り

の赤い靴は文化祭後、ふさえさんの誕生日に届くように贈り、丁寧な礼状が届いた。

二 母になった日

〈萬倍〉

二〇一七年十一月十四日、上村ふさえさんはお元気で、九十一歳の誕生日を迎えた。取りも直さず九十一年前の大正十五（一九二六）年十一月十四日は、みすゞが母になった日である。愛娘を出産したみすゞは、必ずやふさえさん誕生の作品を紡いでいるはずだ。一体どれなのかと自問自答を繰り返す中、なんとも不思議な作品に出会った。何度も対峙して、これこそが、探していた作品だと思われた。三卷三十九番〈萬倍〉（全集収載詩の三八九番目）であった。

萬倍

世界中の王様の、

御殿をみんなよせたつて、

その萬倍もうつくしい。

——星で飾った夜の空。

世界中の女王様の、

おべべをみんなよせたつて、

その萬倍もうつくしい。

——水に映つた朝の虹。

星で飾つた夜の空、

水にうつつた朝の虹、

みんな寄せてもその上に、

その萬倍もうつくしい。

——空のむかうの神さまのお國。

作品の表面からは娘の誕生の喜びや、嬉しさの表現が伝わって来ない。代わりに三回も繰り返される「萬倍もうつくしい」から、「空のむかうの神様のお國」が迫ってくる。行間からはこの世でない美しく神々しい光に包まれた、静かな不思議な世界が広がってくる。『童謡詩人・金子みすゞの生涯』の年譜に、宮本と結婚したばかりの大正十五（一九二六）年中頃、「一度離婚の話が出る。」とある。そうした後で胸に抱いているのは、いままで存在しなかった愛しいわが子。これは人知を超えた、まさに神秘としかいえない神様からの贈り物。心から驚嘆しているテルとみすゞが重なって見えてくる。母親になったとまどいと喜びをじわじわと味わいながら、美しく変化させた（萬倍）は、みすゞが母になった日の記念すべき作品であると、考えたい。

みすゞが母になった日は、紛れもないふさえさんの誕生日であ

る。その、ふさえさん自身による誕生のコメントが、『童謡詩人・金子みすゞの生涯』にあった。「前日にきたお産婆さんが、明日の朝まで大丈夫といって帰ったその夜中に、お産婆さんが間に合わないうちに私が生まれたそうです。」

作品の満天の星や朝の虹が、「みすゞの喜びと愛の温もりに満ちた心象風景」であることは、容易に推察できた。念のため関係機関を訪ねて、九十一年前のふさえさん誕生日の天候などの調査を依頼した。先ず下関地方气象台で天候を、北九州市門司・第七管区海上保安部では下関壇ノ浦の潮汐などの検証の報告を受けた。大正十五年（一九二六）十一月十三日・十四日の結果は、下記の通りであった。

十三日 雨 日の出六時四十五分 日の入り十七時十五分 月
齡七、五 満潮午前一時、午後十五〜十六時
十四日 曇り 日の出六時四十六分 日の入り十七時十五分 月
齡八、五 満潮午前三時、午後五時

実際にはふさえさん誕生の夜と迎えた朝は、あいにくの天気だった。が、娘を得た喜びは喻えようもなく、なにものにも勝った。天候のいかんに左右されない大きな喜びは、わが子を得たことであった。娘誕生の日の天候に反して、夜の星や朝の虹を詠み、それにも勝るものとして神様の国がある。みすゞがペンで表

母親になった金子みすゞ

現した万倍も美しい神様の国こそは、いとし子が使わされた国であつた。みすゞにとって〈萬倍〉は、母になつた喜びを愛しいわが子へ届けた愛の表現であつた。

三 はじめての子守唄 〈ねんねの汽車〉

みすゞには子守唄の王道のような「ねんねよねんね、／＼のくれがたは、／＼」の〈守歌〉(第三卷二二三番・全集収載詩の四七三番目)や「ねんねよ、ねんね、ざんぶりこ、／＼ざんぶり、ざぶりこ、ねんねしな／＼」の〈波の子守唄〉(第三卷一四二番・全集収載詩の四九二番目)がある。しかし記念すべき大切な子守唄は、前記〈萬倍〉の次に当たる〈ねんねの汽車〉(三卷四十番・全集収載詩の三九〇番目)で、真正正銘ふさえさんへの子守唄である。

ねんねの汽車

ねんねん寝る子は汽車に乗る、
ねんねの駅を汽車は出る。

汽車の通るは夢のくに、
なんきん玉の地の上の、
赤い線路をひた走り。

月は明るし、雲は紅、
硝子の塔のてつぺんに、
ちらりと白い星も出る。

みんなお窓に見て過ぎて、
おめざの駅へ汽車は着く。

お夢のくにお土産は、
誰も持つては歸れない。
お夢のくにへゆくみちは、
ねんねの汽車が知るばかり。

題材に汽車を取り入れたのはなぜだろうか。テルが育つた仙崎に汽車が走つたのは、没後(昭和五(一九三〇)年三月十日)の五月十五日であつた。対してふさえさんが生まれて移つた下関市上新地の住まいは、枕元を汽車が通る(桜山神社下)近さであつた。勇ましく下関駅を出発する列車の汽笛、警笛が聞こえてくる。しかし、夜のしじまにもれてくる夜汽車の汽笛は、みすゞにとっては印象深かつたはずだ。ゆっくりと滑り込むように、終着駅へと走ってくる汽車。近づいてくる車輪の響きが子守唄と繋がっていったのは、当然かもしれない。なお驚いたことに

列車の運行数は、現在、JR下関の着発二七一本であるが、昭和初期より少ないことが（本数の詳細は不明）判明した。

嬰兒は眠って眠って大きく育っていく。ときおり微笑んだり口をしぼめたり、手足を動かすだけで可愛くて、何時間でも寝顔を見続けていたのが母親である。みすゞだけが紡ぐことのできた、はじめての子守唄〈ねんねの汽車〉は、美しい幻想の世界であった。

四 二人でおでかけ 〈花のお使い〉

珍しいほどに弾んで明るい、しかも自己顕示欲さえも少し見え隠れする作品がある。第三巻四十九番・全集収載詩の三九九番目の〈花のお使い〉である。作品は、誰もが私と菊を見ているの、なぜだか分かる？……と、すれ違う人々の好意的な視線をしつかりと受け止めた上で、自問自答を繰り返している。実はね、私はきれいな菊を持っているの、だから私はきれいなよ、と誇らしく晴れやかに詠う。かたくなに孤独を愛していたかに見えていたみすゞだが、日ごとくに母になっていくテルの喜びが、思わずほとばしったのだろう。

花のお使い

白菊、黄菊、

母親になった金子みすゞ

雪のやうな白い菊。
月のやうな、黄菊。

たあれも、誰も、みてる、
私と、花を。

（菊は、きれいな、
私は菊を持つてる、

だから、私はきれいな。）

叔母さん家は遠いけど、
秋で、日和で、いいな。

花のお使い、いいな。

一見、作品の言葉に惑わされる。しかし明らかに高揚する母と娘の、初めての外出を詠ったものだと推察するのは自然である。外出の背景の裏づけに年譜の一部を抜粋してみる。

・大正十五年（一九二六）二月十七日、宮本啓喜と結婚。

* 上山文英堂の二階で新婚生活を始める。

・四月号の『童話』に〈露〉特別募集（西條八十・仏より帰国を記念した公募）第一席になる。七月号を以って『童話』廃刊。

・四月二日、正祐家出。

・四月十一日、正祐、テル夫婦と共に帰関。

母親になつた金子みすゞ

・この事件が引き金になって、松蔵と啓喜の関係悪化。

* 一度離婚の話が出る。

* テルと啓喜は文英堂を出て、下関市大字関後地村一七二四に新居を移す。

・七月七日、童謡詩人会編『日本童謡集』に〈お魚〉と〈大漁〉掲載。

・十一月十四日、ふさえ誕生。

* 下関市上新地町二三七九に移る。

前記の住所を『郷土』第四十二集より提示する。なお『郷土』発行前後には下関市街新地図等を片手に、転々とした住居への幾つもの道を、何度も歩いて検証した。

* 結婚当時の文英堂住所……下関西南部町五十番地……現・下関南部町十九一〇

* 出産時……下関市大字関後地村一七二四番地……現・下関市丸山町一丁目十一一十六

* 産後……下関市上新地二三七九……現・下関市上新地町二丁目一十六

外出は産後に転居した現・上新地から、花のお使いではなく明らかに、ふさえさんを抱いての、二人の初外出である。行

き先の「叔母さん家は遠いけど」は、母・ミチが住む現・南部町にあった上山文英堂である。久方ぶりに今回みすゞが歩いた道を再度検証して、一本の道を確信した。上新地からおよそ三キロ先の南部町への道を簡単に記してみる。「上新地―廠島神社―関西小学校―豊前田の谷―豊前田通り―文英堂―わずかな道であっても、まだ首が据わらない嬰兒のふさえさんを抱えての外出を、遠くに感じたのは実感にちがいない。この頃下関の地は、生き馬の目を抜くとも言われた雑踏する大都会だった。作品には、色白で愛らしい嬰兒と、誇らしげな母親の姿がある。壊れ物を抱くような、ぎこちない母になりたてのテルが見える。馬関の街を抜けながらテルが体感したのは、思いもかけない行き交う人々の温かい眼差しだったのでろう。みすゞは至福を隠しきれない、素直な母親・テルの「二人でおでかけ」の母心を〈花のお使ひ〉に詠った。なお大正十五年（一九二六）テルは結婚、離婚の話が持ち上がったあとに身重判明、入籍、出産さらに三度の転居と、激動の一年であった。一方みすゞは女性として与謝野晶子に次ぐ、日本童謡詩人会会員に推挙され、童謡詩人・金子みすゞとして、日本を代表する文人たちの仲間入りを果たした。

五 芥川に寄り添ってみつけた幸せ〈あと押し〉

〈花のお使ひ〉以降みすゞの作品から、母親の和やかな横顔を垣間見ることは少なくなった。夫と弟・正祐の間がしっくり行か

ないまま、次第に上明文英堂にも足が遠のいていた。たまに出かけて来たテルへの正祐の厳しい反応を『童謡詩人・金子みすゞの生涯』から引用してみる。

……うれしそうに、「ふうちゃん、ふうちゃん」とふさえをあやしているみすゞを見ると、—これじゃあ、まるで芥川龍之介の〈あばばば〉じゃないか。と、正祐は思った。〈あばばば〉は、みすゞと正祐二人ともが愛読していた芥川龍之介の短編の中の一つで、淡い恋心を抱いていた麗人が結婚して赤ん坊を抱き、見栄も外見もなく「あばばば」とやっている姿を見て、幻滅する話だ。さらに、正祐はいった。「テルちゃんは平凡になった」この正祐の言葉に対し、みすゞは考え、そして悩み、手紙を書いた。十三枚にもわたる手紙だった。それぞれ答える形で出した正祐の手紙が残っている。

……恩人、金子みすゞよ、偉大なる天才金子みすゞや、あゝ、若くしておんみは逝きたり。私にとっては、金子みすゞは故人です。そして生前そのねうちを充分知るの明かなく、遺稿の前に感激と追悼の涙をしぼり、そして、自分も出来るだけは自分の才能をのびさうと、……そうした霊の交りをつづけて居る私です。：

一月十九日夜（筆者注：昭和二年（一九二七））しるす、

では さよなら

母親になった金子みすゞ

さびしきイゴイストのシナリオライターより
かなしきイマジニストの詩人へおくる

正祐の手紙も、みすゞと同じく細かい字で便箋十三枚にわたり、みすゞは受け取った手紙の〈故人〉という箇所にも、赤インクで波線を引き、さらに〈ありがとう、ありがとう……繰り返し読んで、私はうれしくて、悲しく、やるせない〉と、便箋右端に記していたという。驚嘆するのは、更に続いた二人の手紙の仲介が、母・ミチであったということだ。

手紙にたとえ「ありがとう、ありがう」と記したといえ、この激しい手紙を手にしたみすゞに最早、ふうちゃんを見つめるだけで至福を味わう、母親の感情とゆとりは消え失せたのではないだろうか。そんな空疎な時期に、大事件が起きた。昭和二年（一九二七）七月二十四日、みすゞが殊に愛読していた作家・芥川龍之介が亡くなった。二日後の七月二十六日、目にしたはずの地元新聞二社の見出しを拾ってみる。

①馬関毎日新聞 「芥川龍之介氏毒薬自殺を遂ぐ 聖書を読みながら静かに絶命す 極度の神経衰弱から厭世心を起こしたもの」
②「知人続々駆けつく 大混雑の芥川邸」
③「辞世の句」
④「告別式 谷中斎場で二七日執行」
⑤「死を覚悟して近來多作す 芥川氏は元來寡作家・久米正雄氏談」
⑥「文字夫人に宛てた遺書 原稿紙一枚半

母親になった金子みすゞ

にペンの走り書き」「小学全集と胸の病が原因 それを苦しめた
為神経衰弱が高じた」「妻子に遺産 百坪の土地と著作権貯金な
ど」「涙をふく菊池寛氏 手記は久米氏が発表す」

②防長新聞 「劇業自殺を遂げた文壇の寵児・芥川龍之介氏 極
度の神経衰弱と家庭的複雑な憂苦が原因」「あわれを止めた文字
夫人宛の遺書 原稿紙一枚半にした、めたペンの走り書き」「文
壇知友の驚愕と未亡人遺子の悲哀」(所蔵先：山口県立図書館)

芥川の死はセンセーショナルに、書きたてられていた。ファン
であったみすゞは何らかの形で、芥川へのオマージュ作を遺して
いる筈だ。それを探るヒントが芥川の『年末の一日』である。芥
川が漱石から送られた「文士を押すのではなく、牛のように人間
を押せ」という、書簡に応えた作品だ。この作について論じた佐
藤泰正氏の熱い語りを『文学の力』より引く。

晩期的一篇『年末の一日』語る所は意味深い。訪問者を久しぶ
りに漱石の墓に案内しようとして迷い、別れてからの帰り道、八
幡坂という坂の下にさしかかり、何か箱車を押している男に、お
れも押してやると言い、それが胎衣会社の車であることに気がき
ながらも、木枯らしの中を妙な興奮を感じながら、何かと闘うよ
うな気持ちで一心に押し続ける姿は、そこに芥川が何を込めて語
っているかは明らかであろう。胎衣とは赤ん坊を産んだ時に出

来る胎盤その他で、言わば命の抜け殻ではないか。漱石先生は人
間を、人間の命を押せと言った。しかし自分のやってきた仕事の
中身は、まさに命の抜け殻ともいふべきものではなかったか。も
はやお分かりであろう。ここに語られる、芥川が半生を振り返っ
ての切迫した心情には、なお我々読者の胸を搏つ熱いものがある
う。

さて、この『年末の一日』の世界を彷彿とさせる、みすゞの詩
が、第三巻八十八番・全集収載詩四三八番目に当たる(あと押
し)である。

あと押し

車のと押し、
せつせつせ。

どっこい、重いぞ
上り坂、

汗が、ぼつたり、
地にしみる。

車のと押し、
せつせつせ。

ほらほら速いぞ
くだ
下り坂、

みちの小石が、
縞しまになる。

車のあと押し、
せつせつせ。

下ばつかりを

みてゆくと、

眞紅まつかな薔薇ばらが、

みつかった。

芥川の死後、特に晩年の作品に世間の絶大な関心(注9)が寄せられ出版が相次いだのは、前記の地方新聞の扱いからも想像に難くない。芥川の大ファン・みずぶが丁寧に『年末の一日』に寄り添い、芥川の声聞いて生み出した作品こそが、〈あと押し〉ではないだろうか。念のため二つの作を対比してみたい。

・『年末の一日』——箱車を「ぐんぐんその車を押しやっした」中身は「胎衣」

・〈あと押し〉——「車のあと押し、／せつせつせ」見つけたものは「眞紅まつかな薔薇ばら」

命をかけて闘った芥川が押しした車には、命の抜け殻である胎衣えな

母親になった金子みずぶ

が入っており、みずぶが押しした車の足元に見つけたのは、生きている眞紅まつかな薔薇ばらであった。共通しているのは、「車を押しす」であり、そこに在るものは「赤い命」であった。ただし大きな相違は、「赤い命」は片や「死」を、片や「生」を象徴するものであったことである。しかし共に「自身の命を見つめ、命そのものと闘って紡いだ作品」であることには違いはない。

みずぶは芥川へ送られた漱石の書簡を知る由もない。しかし『年末の一日』から、実に大きなメッセージを受け止めていた。テルにとって、夫と弟、義父と夫の不仲や、子育てに追われるなか、「すでにみずぶは故人だ」という容赦のない弟の激励が、どんなにか辛かったろう。それは激励とはいえ、決して力にはならなかったはずだ。そんな、みずぶが芥川の『年末の一日』を読んだと思える、根拠を提示してみたい。

ある日突然東京在住の作家・翻訳家の松本侑子(注10)さんから貴重な資料が、大量に届いた。その一部である「高知県佐川町立図書館所蔵の「上山雅輔年記 大正十〜昭和四年（一九二一〜一九二九）」読解・編集・テキスト化 松本侑子 二〇一五」から、雅輔（正祐）と、芥川の接点を引用してみる。

大正十五年（一九二六）十一月 芥川龍之介の小品「魔術」をシナリオ化してノートに書きとめる。いわば処女作品なり。

昭和二年（一九二七）二月「杜子春」の脚色に着手。（五月了）

七月二十四日、芥川竜之介、自殺。

この年、小さい頃よく可愛がってくれた仙崎の祖母金子ウメが老衰（？）で亡くなったが、これにはそれほど悲しみはなかった。むしろ七月二十四日に自殺した芥川龍之介の死の方がショックだった。これはやがて昭和六年（正しくは五年）に自殺することになる姉照子（筆者注…テル）には、尚更、決定的な影響を与えたようである。

このことからお分かりのように、みすゞが芥川ファンであったことは周知されていたが、正祐もまた同じであった。前記の芥川の〈あはばば〉にあったように、常に二人の間では、芥川が身近であったことが窺える。書店の息子である正祐がテルと、『年末の一日』の初出の雑誌・『新潮』を、また収録された『湖南の扇』を手にしたことは十分に推測される。むろんテルが芥川の死後に、再度対峙したはずの『年末の一日』からは、ずっしりと、人生についての思いを問われたことには間違いない。

やがて芥川の『年末の一日』をヒントに、みすゞは見つけたのだ。童謡詩人として、精進し続けていた日々もあった（上り坂）。結婚して妻や主婦として、始まった暮らしに追われる毎日に、詩作に没頭することとは無縁になった（下り坂）。でも一番の幸せ

とはその暮らしの中でこそ、与えられ得られた愛しいわが子だった（真紅な薔薇）。芥川の一作品の本質に触れ、自身と向き合い、真摯に応えてできたのが〈あへと押し〉であった。みすゞが芥川に寄り添ってみつけた幸せは、「ふさえさん」の母として生きる喜びであった。

六 母ゆえに書き換えた入選作品 〈雑まつり〉

初めての『金子みすゞ全集』（一九八四年）が出版されたのは、発掘者の矢崎節夫氏の功績である。全集はみすゞ自身が編んだ、三冊の手帳（遺稿集）を底本とした。しかし遺稿作品の一部は、出版時までに見えられた各雑誌の入選作品と摩り替えられた。そこで全集は手帳そのものだと得心している読者にとって、およそ二十年後に出版された六冊の現代仮名づかい版『金子みすゞ童謡全集』等との間で混乱が続いている。帯には決定版遺稿全集第一弾①美しい町・上②美しい町・下同時刊行とある。次に全集第一巻九番幻の〈雑まつり〉から、母心を提示してみる。

①大正十二年（一九二三）六月頃、二十歳の詩作

②入選『愛誦』昭和二年（一九二七）四月号（二月頃投稿）・ふさえさん・生後二ヶ月

③遺稿作品・みすゞ手帳のもの昭和四年（一九二九）……夏から秋に清書・ふさえさん・二歳十ヶ月

④金子みすゞ全集『美しい町』昭和五十九年（一九八四）二月二十八日刊行

⑤金子みすゞ童謡全集一『美しい町・上』二〇〇三年十月二十四日刊行

①、②

雛まつり

お雛まつりは
来たけれど

私はなんにも持たないの。

となりの雛は
うつくしい

けれどもあれはひとのもの

私は^{わたし}手なしの
人形と

ふたりでお菱^{ひし}をたべませう

③、④、⑤

雛まつり

雛のお節句来たけれど、

私はなんにも持たないの。

となりの雛はうつくしい、

けれどもあれはひとのもの。

私はちひさなお人形と、

ふたりでお菱^{ひし}をたべませう。

平成十九年（二〇〇七）十月二十一日京都二条通にある書店か

ら、待ちに待っていた収載号・雑誌『愛誦』の四冊が届いた。実際に確かめたかったその一冊が①、②の〈雛まつり〉であった。

二十歳の若いみすゞが詩作した、人形は手無しであった。結婚・出産・家庭や親族間の諸問題で激動の年であった大正十五年が去り、みすゞが投稿したのもこの形であった。ひたすら眠る嬰兒

（二月）を見詰めるそばで、詩作する時間も持てない若い母は、すでに書き溜めていた初期の作品群から投稿したと推測できる。

題材が春号にふさわしく、選者の八十の作品^{（作）}を意識したかのような作品を選んだのだろう。

しかし遺稿作品の清書に取り組んだとき、眼前のふさえさんは可愛い盛りの二歳八ヶ月頃であった。入選作品〈雛まつり〉といえども「手なし」は、たちまち「ちひさな」に、とって代わった。ましてや「手なしの人形」は、ふさえさんである「ちひ

さなお人形」へと明らかに変わったのは当然の成り行きであろう。始めての『金子みすゞ全集』には、入選作品の〈雛まつり〉

が、発見できず、修正された遺稿作品が掲載された。母ゆえに書き換えられた入選作品には、母親の心情がそっと畳み込まれた。

二〇〇三年のみすゞ全集は、あくまで遺稿作品が掲載された。したがって、若いみすゞの幻の〈雛まつり〉を知らない読者は多

い。

母親になった金子みすゞ

おわりに

六作品から共に迫ってきた「色」がある。それは「赤い色」であった。もとより、どの作品にも出ているのではなく、六作中の三作品に表現されている。しかし、生命を繋ぐ赤い血が、全六作の根底に脈々と流れていると感じる。胎内で生命を育み、産み、乳房を含ませ育てたみすゞと同じ、私も母親の一人だからかもしれない。

今回想いもかけず高齢での入会を許され、紙面をいただいた。一番ご報告しなかったのは佐藤泰正先生だ。先生の芥川龍之介の『年末の一日』の講義から、丸八年が経過した。しかし、あの日の先生の熱い講義に、芥川とみすゞが一つになった瞬間を今も覚えている。こうして、論文の書き方の作法も知らない私が、亡き佐藤先生を始め、倉本先生のお力添えをいただいたことに深謝する。

金子みすゞの作品から、こぼれてくる母親の心、葛藤などを提示してみた。そろそろ童謡詩人のレットルを外した、詩人・金子みすゞとしての認知を望むばかりである。

参考文献

- (ア)『金子みすゞ全集』(JULIA出版局、一九八四年)
 (イ)『童謡詩人・金子みすゞの生涯』矢崎節夫著(JULIA出版局、

一九九三年)

(ウ)『幼児の発達百科七からだ運動』阿久津邦男著(フジテレビ総合研究所、一九七三年)

(エ)『〇カ月〜三才月齡別・赤ちゃんのからだ&こころ発達BOOK』榊原洋一監修(主婦の友社、二〇〇八年)

(オ)『郷土』第四十二集(金子みすゞ下関での居住地と上山文英堂本店の所在地・木原豊美)(下関郷土会、一九九九年)

(カ)『文学の力とは何か』佐藤泰正著(翰林書房、二〇一五年)

注

(1)『金子みすゞ心の風景』写真・栗原弘、解説・木原豊美(美術年鑑社、二〇一〇年)

(2)『金子みすゞ再発見』堀切実・木原豊美著(勉誠出版、二〇一四)

(3)上山正祐(作詞家・劇作家の上山雅輔)

(4)野口雨情(作詞(赤い靴)大正十年)、本居長与(作曲(大正十一年)実話を下敷き)

(5)下関着発列車数の減少は特急、準急、急行、夜行列車運行の廃止(JR下関駅)による。

(6)馬関は当時、市民が下関の街へ寄せた愛称

(7)童謡詩人会には、泉鏡花・小川未明・河井醉茗・北原白秋・西條八十・サトウハチロー・島崎藤村・白鳥省吾・薄田泣菫・竹久夢二・野口雨情・浜田広介・三木露風・若山牧水らが会員に名を連ねた。

(8)『年末の一日』初出は、大正十五年(一九二〇)一月一日発行『雑誌』新潮

収録・初刊『湖南の扇』(文芸春秋社出版部、昭和二(一九二七)年六月)

(9) 『芥川龍之介集』(新潮社、一九二七年九月)、『芥川龍之介全集』(岩

波書店、十一月)

(10) 松本侑子『みすゞと雅輔』(新潮社、二〇一七年三月)

(11) 『金子みすゞ童謡全集①美しい町・上』(二〇〇一・十)

『金子みすゞ童謡全集②美しい町・下』(二〇〇一・十)

『金子みすゞ童謡全集③空のかあさま・上』(二〇〇四・一)

『金子みすゞ童謡全集④空のかあさま・下』(二〇〇四・一)

『金子みすゞ童謡全集⑤さみしい王女・上』(二〇〇四・三)

『金子みすゞ童謡全集⑥さみしい王女・下』(二〇〇四・三)

六冊共に矢崎節夫 監修 JULA出版局

(12) 西條八十『人形の足』大正十(一九二一年)年『赤い鳥』八月号

木原 豊美(きはらとよみ) 会員・金子みすゞ研究家